

# 朝鮮半島はなぜ分断されたか——米と日本の責任を問う

18.08.05 リブインピース@カフェ

## (1) なぜこの問題が重要か

- ・米朝首脳会談、南北首脳会談について考えるにあたり、改めて考えなければならないのは、そもそもなぜ朝鮮半島が2つの国に分断されているのか、ということ。
- ・そもそも朝鮮半島が分断されていなければ、激しい南北対立も核問題もなかった。分断されていることに、誰が、どのような責任を負っているのかを考えることは、朝鮮半島での戦争と平和の問題について考える上での前提となるはず。
- ・米でも日本でも、朝鮮半島分断を当たり前のようを見て、北朝鮮をいかに抑え込むか、ということしか考えていない。良くても他人事。朝鮮半島分断に対する、自らの国の歴史的責任など眼中にない。上から目線で、北朝鮮や韓国に「ああしろ」「こうしなければならぬ」と言う前に、考えなければならないことがある。
- ・何よりも、朝鮮の分断に対しては日本が直接の、第一の責任を負っている。植民地にして徹底した搾取と収奪の対象とした上、連合国との戦争を始め、結果として米とソ連による分割された解放を引き起こした。日本の植民地化がなければ分断は起こらなかった。また、日本は朝鮮戦争に機雷掃海部隊や米軍輸送のための民間輸送船を送って直接加担し、さらに米軍が朝鮮で戦争をするために不可欠の基地と後方支援を提供し戦争を支えた。そして、日本の戦後「復興」は、朝鮮戦争による「特需」に大きく依拠していたこと、すなわち、韓国・朝鮮人の血の上に築かれたことを、忘れることはできない。
- ・ここでは主に、朝鮮半島南部の動きを中心に、朝鮮戦争勃発までの、解放された朝鮮が2つの国家に引き裂かれる過程を見る。

## (2) 米ソによる北緯38度線での分割占領

45.08.09 ソ連が対日参戦

08.14 トルーマン米大統領が分割占領案を承認

08.15 日本が無条件降伏

08.16 ソ連が分割占領に同意

08.17 分割占領をトルーマンが認可（一般命令第一号）

08.21 ソ連軍、平壤に進駐

08.25 米軍、仁川に上陸

09.02 マッカーサーが分割占領策を発表

- ・「ヤルタ協定」に基づき対日参戦したソ連が、日本軍を破り、朝鮮半島に進軍。朝鮮半島全体をソ連に解放されることを恐れた米が、ソ連に北緯38度線で分割占領することを提案。ソ連が受け入れ。

### (3) 「朝鮮人民共和国」建国の運動と米軍政による妨害

- 45.08.15 「建国準備委員会（建準）」を結成（呂運亨<sup>ヨウニョン</sup>ら）。約2週間で145支部（全行政単位の58.7%）
- 09.06 建準、朝鮮人民共和国樹立を発表。建準は「中央人民委員会」に改称、地方支部は「人民委員会」に。民族反逆者の土地を没収し農民に無償配布、外圧による内政干渉反対などを訴え
- 09.07 米軍、朝鮮南部に軍政布告
- 09.09 朝鮮総督府が降伏文書に署名し、アメリカ軍に総督府の権限を委譲
- 09.14 建準、政府閣僚名簿を発表。政府主席李承晩、副主席呂運亨<sup>キムグ</sup>、金九、金日成ら。李承晩、金九らは参加を拒否。米軍政は人民共和国解体を命令
- 10.10 人民共和国の「46年3月に総選挙実施」の呼びかけに対し、米軍政庁が「総選挙は軍政庁に対する公然たる敵対行為」との声明を発表。朝鮮人民共和国の解散を改めて命じる
- 10.16 李承晩が米から米軍機で帰国。米軍政庁への協力と「反共統一」を訴えて朝鮮人民共和国を非難
- 11.20 人民共和国第1回全国人民委員会代表者大会（ソウル）。軍政との衝突は避けつつ、人民共和国の国号死守を決議
- 12.12 米軍政庁が改めて朝鮮人民共和国は不法と宣言し、人民委員会を非合法化
- 12.19 米軍政がソウルの人民共和国庁舎を急襲し解体

- ・日本軍国主義の敗戦によって朝鮮半島は解放されたが、朝鮮国家の再建は容易ではなかった。その解放は主に外からの力でなされたものであり、再建を担うべき人は、殺されるか、長く獄中にあるか、地下に潜るか、海外に逃れるかしていた。朝鮮国家の再建に著しい困難を強いた責任は、日本の侵略と植民地支配にある。
- ・そうした中でも、解放のその日に建国準備委員会が組織され、短期間で多くの支部が作られるなど、再建の準備がいち早く開始された。地方では人民委員会が自治を行い、治安隊が日本の敗戦で崩壊した警察に代わって治安維持を担った。
- ・「朝鮮人民共和国」という国号からしても、南と北で国として目指す方向が違っていた訳ではない。米の妨害さえなければ、統一国家を建設できたはず。
- ・しかし、米軍政は人民共和国の解体を命令し、人民委員会の非合法化。45年10～11月、米軍は南朝鮮各地に進駐して軍政庁を樹立。日本の植民地下で官僚や警官だった朝鮮人（いわゆる「親日派」）を再登用していった。

### (4) 「信託統治」か「即時独立」か

- 45.12.27 モスクワでの米英ソ三国外相会議。5年信託統治案決定

- 12.28 金九が信託統治反対国民総動員委員会を組織し、激しい反対運動。他の政党・団体も信託統治反対を声明
- 12.31 信託統治反対の大集会・デモ
- 46.01 朝鮮共産党など左派が信託統治賛成に転換
- 01.07 李承晩が信託統治の反対声明
- 03.20 信託統治に関する米ソ共同委員会開始
- 05.06 米ソ共同委員会無期休会

- ・米ソは、1945年2月の「ヤルタ協定」で、朝鮮は解放後「信託統治」を経て独立させることで合意していた（独立時はもちろん統一国家として）。
- ・信託期間について、米は「数十年」を主張したが、ソ連が「5年」に短縮するよう主張し、45年12月に合意。
- ・しかしそれは、「即時独立」を求める朝鮮の民衆の多数の心情には合わない。
- ・信託統治はもともと米が推進しており、左翼はもちろん右翼の民族主義者からも反発を買っていたが、ソ連が信託統治に同意し、左翼が賛成に回ったことを利用して、米や右翼はソ連に責任を押しつけ、民衆の信託反対をあおった。
- ・信託統治を巡って協議する米ソ共同委員会は、46年3月に始まったが、5月に決裂。これにより、信託統治構想は破綻。

#### (5) 米による南部単独選挙の画策と激しい反対闘争

- 46.05.15 米軍政、「精版社偽造紙幣事件」を発表。共産党への弾圧開始
- 06.03 李承晩、井<sup>チョンウプ</sup>邑での演説で南部単独政府樹立を主張
- 09.24 朝鮮南部で米軍政に抗議するゼネスト
- 10.01～慶尚北道大邱で市民が警察署などを襲撃。多地域へも連鎖的に広がる（十月抗争）
- 10.22 米軍政が李承晩を「南朝鮮過渡政府」の大統領に据える
- 12.12 米軍政が南朝鮮過渡立法議院を設立。ほとんどを親日派が占め、米軍政の右翼的翼賛機関に
- 47.03.01 済州島済州邑で独立運動記念集会後のデモに軍政警察が発砲し十数名の死傷者（4・3事件の発端）
- 05.21 第2次米ソ共同委員会開始
- 05 米が朝鮮独立問題を国連総会に提起。「48年3月までに国連監視下で南北統一選挙を実施する」案を採択。ソ連は「モスクワ協定」無視を批判し、「米ソ両軍の撤退と朝鮮人の自主政権作りに委ねる」ことを提案
- 07.19 呂運亨暗殺
- 秋頃 中国内戦で共産党優勢が明白に
- 10.18 第2次米ソ共同委員会無期限休会
- 11.14 国連総会、国連監視下での朝鮮総選挙案採択

- 48.02.07 **南部で総選挙反対運動激化。単独選挙阻止を掲げて30万人がストライキ（2・7救国闘争）**
- 02.26 **国連小総会で南朝鮮の「単独選挙」案を採択**
- 03.12 金九、金奎植<sup>キムギョシク</sup>らが南朝鮮の単独総選挙反対声明を発表
- 04.03~ **済州島で単独選挙に反対して南労党主導の武装蜂起始まる（4・3事件）**
- 04.19 **全朝鮮正当社会団体代表連席会議（平壤）。金九ら南部の協商派も参加**
- 04.27 **南北代表者会議（平壤）。金九、金奎植、金日成ら参加。米ソ両軍の即時撤退、撤退後の内紛回避、単独選挙反対などで一致**
- 05.10 **南部で単独選挙。反対派はボイコット。結果は右派が圧倒的多数。李承晩を初代大統領に選出**
- 07.24 大統領就任式
- 08.15 **大韓民国政府樹立を宣布**
- 09.09 **朝鮮民主主義人民共和国建国を宣布**
- 10.19 **麗水・順天で軍の一部が反乱**
- 11.20 国家保安法制定（49年だけで118,621名逮捕）
- 12 ソ連軍撤退完了
- 49.05.12 韓国の8団体が北朝鮮の民主主義民族戦線中央委に対し、祖国統一民主主義戦線の結成を提唱
- 06 米軍撤退完了
- 06.25 **祖国統一民主主義戦線結成大会（平壤）**
- 06.26 金九暗殺（祖国統一民主主義戦線結成大会から帰った直後）
- 10.01 中華人民共和国建国を宣言
- 50.05.30 韓国議会総選挙で李承晩派大敗
- 06.07 祖国統一民主主義戦線が南北統一協議会開催を呼びかけ
- 06.19 北朝鮮の最高人民会議常任委員会が南北の国会による連合政府の樹立を呼びかけ

- ・ 信託統治構想が破綻し、米は、国連で朝鮮独立問題を決着させる方針に転換。争点は、「南部単独選挙実施」の是非、すなわち「統一国家」か「分断国家」か、に移る。
- ・ 米は、当初は表向き「南北統一」を掲げながらも、実質的には一貫して南朝鮮単独政府樹立を追求。しかし、朝鮮では右派も含め統一国家を求める世論が圧倒的。その中で米は、ほとんど唯一「南朝鮮単独政府樹立」を主張していた李承晩を推し立てる。
- ・ 米は南朝鮮政府を親米国家とするため、左翼への弾圧を強化。46年5月、「ニセ札作り」をでっち上げ、共産党弾圧を鮮明に。背景には、米ソ対立の激化と、中国の国共内戦での共産党の優勢があった。
- ・ 弾圧にもかかわらず、47年7月の南部での世論調査（朝鮮新聞記者会）では、国号「朝鮮人民共和国」支持が69.5%、政権の形態として「人民委員会方式」支持が71.5%。
- ・ 48年に入り、「単独選挙阻止」の闘いが南朝鮮全土で繰り広げられ、米軍政と激しく衝突。最も激しい闘いとなったのが済州島。送り込まれた反共極右組織「西北青年団」などの暴力に対し、南労党中心に島民が武装蜂起。54年9月まで続いた闘いで、島民の5

人に1人にあたる6万人が虐殺され、島の村々の70%が焼き尽くされた。

- ・米軍政は単独選挙を強行し、大韓民国樹立を既成事実化。
- ・それでも、右派も参加した北部との協議が行われ、分断回避への努力も行われた。が、その中心人物の1人金九は李承晩により暗殺。

## (6) 朝鮮戦争

- 50.06.25 朝鮮戦争開戦
- 06.27 米軍に出動命令
- 06.27 国連安保理が北朝鮮非難決議
- 06.28 ソウル陥落
- 07.07 国連安保理が「国連軍」による軍事力行使決定（ソ連は安保理ボイコット）。  
国連軍司令部は東京
- 09.15 国連軍仁川上陸
- 10.01 国連軍38度線を越えて北上
- 10.25 中国人民志願軍が参戦
- 51.07.08 開城で休戦会談開始
- 10.25 板門店で休戦会談再開
- 53.07.27 板門店で休戦協定調印

- ・南部に進軍した朝鮮人民軍の占領下では、戦争の最中に、45年～46年に解体された人民委員会の再建、収監されていた左翼の解放、土地の再配分、貯蔵米の貧困層への分配、日本人の財産没収、などが実施された。この実施には、南北の労働党がともに関わった。
- ・北朝鮮の都市破壊の破壊規模は、第2次大戦での日本やドイツをはるかに上回る。  
朝鮮に米が投下した爆弾 63万5000トン > 第2次大戦中太平洋全域に投下した 50万3000トン  
北朝鮮の都市や町は市街地の40～90%が破壊 > 日本では60都市が平均43%破壊

## (7) 結論

- ・朝鮮戦争を「北朝鮮の南への侵略」と考えることは誤り。朝鮮という本来1つである国家、民族の内戦であった。
- ・朝鮮戦争以前に、南部ではすでに10万人以上が政治的暴力で死亡していた。朝鮮戦争はその延長。もともと南部で戦われていた内戦が、南北に拡大したものと考えべき。したがって、その起源は日本の植民地支配と米による南部単独選挙強行にある。
- ・分断と内戦の直接の原因は、南部に軍政を敷いた米が、対ソ連・対中国・反共の思惑で、朝鮮人の「自分たちの国を作る」という意志を全く無視して、朝鮮南部に自分の都合のよい国を作ろうとしたこと。

- ・「日本の植民地帝国の崩壊を起源とし、国を統一し変革していくための内戦であり革命戦争だった」（ブルース・カミングス「朝鮮戦争の起源」2 下 p.768）。「この内戦は、45年の政治闘争に始まり、続く 2 年間で人民委員会を巡る抗争として深刻化し、46 年秋に大規模な反乱が起き、48 ～ 50 年に境界付近におけるゲリラ戦や限定戦争へエスカレート。6 月の開戦はその結末」（ブルース・カミングス）。
- ・日本の侵略と植民地支配からようやく解放を迎え、当然統一された朝鮮国家が回復されることが期待されたが、そうならなかったばかりか、同じ民族同士の「血で血を洗う」ような内戦を経て、分断国家が固定化され、その後 70 年にわたって対立されてきた。そうした苦しみを韓国・朝鮮人に押しつけてきたという事実。日本で朝鮮半島の問題に何か語ろうとする場合には、最低このことを認識した上で語るべき。

## （8）参考文献

- ・ブルース・カミングス「朝鮮戦争の起源」1 / 2（明石書店）
- ・ブルース・カミングス「朝鮮戦争論——忘れられたジェノサイド（明石書店）
- ・朝鮮史研究会／岩田功吉「朝鮮の歴史」（三省堂）
- ・李景珉「増補 朝鮮現代史の岐路—なぜ朝鮮半島は分断されたのか」（平凡社選書）
- ・金時鐘「朝鮮と日本に生きる——済州島から猪飼野へ」（岩波新書）